東北大学大学院　国際文化研究科

GSICS
TOHOKU UNIVERSITY

GLOBE

http://www.intcul.tohoku.ac.jp

国際文化研究科　広報

No.35

Oct 2022

Contents

02 研究科長メッセージ

03 コロナ禍の国際文化研究科

04 研究最前線
佐藤　正弘 准教授
鄭　嫣婷 准教授

06 外側からみた国際文化研究科
水川　淳 先生
新任教員紹介
和田　萌 助教

07 退職教員からの言葉
小野　尚之 教授
副島　健作 教授
野村　啓介 教授

08 受賞報告

09 修了者からのメッセージ
Rachel Naddeo Gomes さん
坂場　寛子 さん

10 科研費採択報告

12 INFORMATION
○キャリア講習会
○公開講座
○オンライン入試説明会
○地震の被害状況
○入試日程

研究科長メッセージ

東北大学にとって今年は、大学創立115周年、法文学部の設置により総合大学となって100周年の節目の年にあたります。その中にあって、国際文化研究科は令和5（2023）年4月に創設30周年を迎えます。平成5（1993）年の発足以来これまでに977名の修士号取得者、233名の博士号取得者（うち論文博士11名を含む）を輩出してきました。当初は、2専攻13講座から構成されていましたが、途中の3専攻18講座体制を経て、現在は1専攻8講座という体制になっています。現在の8講座は、地域文化研究、グローバル共生社会研究、言語総合研究という3つの分野に配置され、国際的、学際的な視点から教育・研究を推進しています。

創設当初と現在を入学者の状況で比較してみます。博士課程前期2年の課程（修士課程）では、平成5年は入学者49名（定員37名）で、そのうち外国人学生は6名でした。外国人学生比率は12%あまりでした。令和4年度では、入学者30名（定員35名）で、そのうち外国人学生は29名で、その比率は約97%です。博士課程後期3年の課程（博士課程）に目を向けると、学生の受け入れを始めた平成7年度は入学者18名（定員29名）で、そのうち外国人学生は1名で、その比率は約6%でした。令和4年度では、入学者19名（定員16名）で、そのうち外国人学生は17名、その比率は約89%です。

修士課程、博士課程のいずれにおいても、外国人学生の数が増加していることが顕著です。この背景には、国内外の経済を含む諸情勢の変化、日本人学生の大学院進学の停滞、「留学生30万人計画」を代表とする国のグローバル戦略など、様々な要因が考えられます。もとより文化・社会・言語を国際的な視点から研究することを中心に据える本研究科にとっては、多様なバックグラウンドを持つ学生が集うことは歓迎すべきことであります。

次に教員構成から設立当初と現在を比べてみます。平成5年は、教授26名、助教授（現在の准教授）24名の総勢50名で、全員が日本人教員でした。他方、現在は、教授19名、准教授17名、助教1名の37名から成る体制で、このうち外国人教員は8名となっています。平成27年に組織改編を実施し教員定数を見直したことにより総数は減少していますが、外国人教員比率は0%から約22%に増えています。現在本研究科は、外国人教員比率が東北大学で2番目に高い部局となっています。

また、現在は8講座体制であることを述べましたが、これに加え、英語を教授言語とする2つの国際コースも設置しています。平成24（2012）年度に言語総合科学コース、平成31（2019）年度にグローバルガバナンスと持続可能な開発プログラムを立ち上げ、世界の様々な国や地域からの学生の獲得を推進しています。

設立当初、本研究科は「国際的な地域文化および文化交流に関する学際的、萌芽的な教育・研究を行い、国際化の進展に対応して我が国の内外で活躍し、国際貢献を担いうる優れた人材を養成する」ことを目的としていました。その後、「国際化」という言葉は「グローバル化」という言葉に置き換わり、研究領域のキーワードには持続可能性を視野に入れた社会研究、脳科学も取り入れた総合的な言語科学研究が加わりましたが、「国際」がキーワードであることに変わりはありません。上述した学生および教員の構成の変化は、この理念を追い求めてきた取り組みの一つの表れと言うことができるかもしれません。

国際文化研究科長
高橋　大厚

コロナ禍の国際文化研究科

コロナ下の大学院教育―中間報告、あるいは私的備忘録―

ヨーロッパ・アメリカ研究講座　寺本　成彦

現時点において、新型感染症下での大学院教育も2年半を閲した。これからの感染症の進捗状況はまだ測りがたいが、教員の一人が足掛け3学年の間に取り組まざるを得なかった教育実践について書き残しておくことも、それなりに意味があることかもしれない。

コロナ元年である2020年度は、「BCP（新型コロナウイルス感染拡大防止のための東北大学行動指針）レベル3」と共に幕を開けた。学生・教員の人影絶えたキャンパスを突っ切り、やはり人けのほとんど感じられない研究科棟に通う日々が半年は続いた。マスター共通講義で分担した授業はすべてオンデマンドによるヴィデオ配信、講座の演習は報告者も参加者もすべて文書のやり取りによって「出席」とした。そのうち、とりわけ演習での対面性の欠如が大きな損失であるように感じられ、後期からは早速Google Meet による参加方式に切り替えた。10月からは在外修学者の演習参加もあったが、地球上のどこからでも参加できる強みを実感させられた。それに加えBCPがレベル2に下がり、専門科目の講義では一部対面を解禁できたので、“リアル授業”で質疑応答できること自体が新鮮に感じられた。

2021年度は学年を通じBCPレベル1ないし2であったため、対面授業は一層実施しやすくなった。とは言え依然として在外修学者がいるため、講義ヴィデオの配信も並行して行った。演習は原則対面、事情があれば Meet による参加。そしてこの方式はBCPレベル1の今年度も継続している。

研究科棟内で同僚の教員に“生で”出会うことも、稀にではあるが起こった。「こうして顔を合わせるのは2年ぶりですね!」などという感慨から始まる立ち話は、授業方式についての情報交換であることが多かった。学生たちや同僚たちと同じ場を占める機会が限られ、砂時計の砂が一様にさらさらと落ちていくような2年半ではあったが、ネット環境を駆使した授業方法を習得できた（せざるをえなかった）ことに加えて、実際に人と人とが出会う場こそが教育の“現場”であることを強く再認識できたことは、今般の変事がなければ決して得られない収穫であったことは確かである。

国際文化研究科における新型コロナウィルス感染症を巡る現状

学生アンケートにみる新型コロナウィルス感染拡大の影響

国際文化研究科 学生・進路指導委員会では、研究科が取り組むべき具体的な対応策を検討する目的で2020年6月および2021年6月に学生アンケートを実施いたしました。2022年度は、9月1日の時点でアンケートが実施されておりませんので、2020年度と2021年度の2年間を振り返り、回答が多かった項目を中心に学生の変化をご報告いたします。

生活面での不安の変化（表1）をみてみますと、全体的に不安感が増加していることがうかがえます。これは感染拡大が収まらないことから、自身の感染に関する不安が高まるとともに、自身の経済状況についても不安が生じるようになってきたためと思われます。

次に、授業・研究活動面での不安の変化（表2）をみてみますと、こちらも総じて不安が高まっている傾向がうかがえます。特にオンラインを用いた講義や演習が中心となっていたことから、他の学生とのコミュニケーションが取りにくい状況が続いており、それが不安として表面化してきたことがうかがえます。

国際文化研究科では、学生の不安が軽減されるように工夫を重ねて参りましたが、2022年の1学期においても、研究科の講義は原則としてオンラインで行われていたことから、これらの傾向はより高まっていることが懸念されます。一方、全学教育科目は対面での実施が推奨されており、学内において講義の実施方法に変化が生じつつあります。実際、国際文化研究科の講義や演習においても、工夫し、対面で実施した教員や講座もあります。2022年9月の時点では、今後の感染拡大状況は未だ不透明ではありますが、国際文化研究科では引き続き、学生が安心し、勉学と研究に専心できる環境づくりを進めていきたいと考えております。

表1 生活面での不安の変化　回答は%

	講座学生		英語コース学生	
	N=66	N=18	N=74	N=22
調査実施時期	2020.6	2021.6	2020.6	2021.6
ウィルス感染	11	67	14	75
自身の健康全般	16	59	14	0
自身の経済状況	57	70	0	25

表2 授業・研究活動面での不安の変化　回答は%

	講座学生		英語コース学生	
	N=66	N=18	N=74	N=22
調査実施時期	2020.6	2021.6	2020.6	2021.6
オンライン授業・発表	10	43	14	33
自宅での研究活動	59	73	71	67
他の学生とのコミュニケーション	12	57	0	33

研究最前線

ビッグデータで未来の リサイクル・ステーションをデザイン

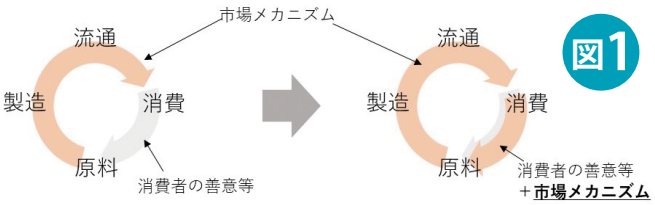
国際環境資源政策論講座
准教授
佐藤　正弘

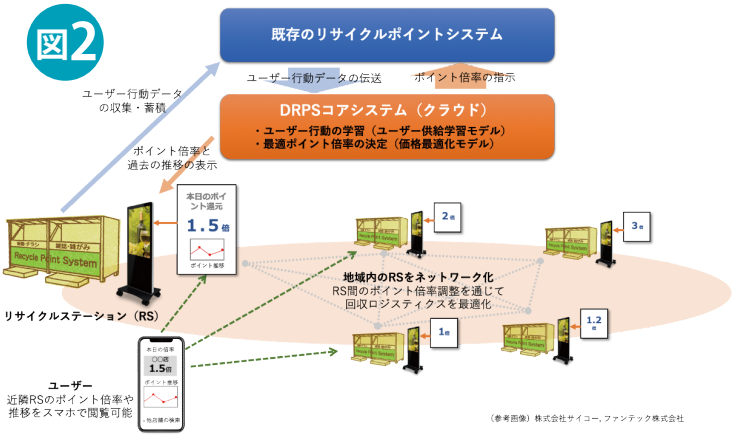
国際文化研究科では、2020年4月より、仙台に拠点を置くリサイクル企業サイコーの親会社SKグループや4510デザイン事務所とともに、古紙（新聞・雑誌・段ボール等）の資源リサイクル行動促進に向けた共同研究を開始しました。

本研究では、スーパーなど全国の小売店舗に設置された約350ヶ所（2020年3月末時点）の資源回収ステーションが記録した、延べ約600万人のユーザーの利用データ等を活用し、資源リサイクル行動の背後にある心理的・経済的・社会的メカニズムの解明に取り組んでいます。また、分析結果に基づき、人間行動科学に裏付けられた新しい資源回収ステーションをデザイン、社会実験を通じて新ステーションの実用化、廃棄物リサイクル行政の効率化、住民の環境意識改善につなげます。

中核となるプロジェクトの一つは、「ダイナミック・リサイクルポイントシステム（DRPS）実証実験」（仮称）です。このプロジェクトは、ダイナミック・プライシング理論に基づく新時代のリサイクルポイントシステムの構築に向け、実店舗で実証実験を行うことを目的としています。ダイナミック・プライシングとは、価格が容易かつ頻繁に調整できる環境で、データから消費者行動に関する学習を行い、その結果を最適な価格決定に還元する方法です。ビッグデータの蓄積や人工知能の進歩とともに、世界各地で様々な分野での活用が進んでいます。身近なところでは、航空チケットの販売価格やホテルの宿泊料金が、予約の時期や条件によって変動する仕組みに取り入れられています。

本プロジェクトは、このダイナミック・プライシング理論をリサイクルに応用するはじめての試みです。その狙いは以下の通りです。これまで、消費者からの廃棄物の持ち込みは、基本的には、消費者の善意や環境意識等に基づく自発的な行動に委ねられてきました。もちろん、それは今後もリサイクル行動の重要な柱であり続けるべきではありますが、一方で、現状として、民間ステーションでのリサイクル率は伸び悩み、よりコストの高い行政回収にまわってしまう分も多くあります。その原因の一端は、「廃棄物＝有価物」という建前とは裏腹に、肝心の「消費→回収」のプロセスが消費者の善意に委ねられ、循環型社会の経済価値の円環がそこで途切れてしまっていることではないかと考えます（図1）。「廃棄物＝有価物」である以上、刻々と変わる内外のリサイクル市場の動向に合わせ、消費者に資源の「有価」の一端が還元され、「原料→生産→消費→回収」までの経済価値の円環が市場メカニズムで繋がることが、循環型社会そのものの持続可能性にとってとても重要になります。そこで、この実証研究では、各ステーションが記録するビッグデータから人工知能が消費者の投入行動を学習・予測し、付与するリサイクルポイントを動的に変える新たなシステムを実店舗で導入します（図2）。消費者は、自分のスマートフォンなどで近隣店舗のポイント倍率をリアルタイムで見ながら、持ち込みのタイミングや分量を自ら調整します。プロジェクトでは、来年度前半以降を目途に、宮城県の複数地域を実験区として、実証実験を開始する予定です。





なお、本研究は、資源回収率の向上や財政支出の削減等を通じて、政府・自治体の循環型社会関連施策に資するほか、持続可能なまちづくり、多様な利害関係者のパートナーシップ構築にも役立つなど、2030年までの「持続可能な開発目標（SDGs）」（目標11（持続可能な都市）・目標12（持続可能な消費と生産）・目標17（実施手段））の達成にも貢献することが期待されます。

国際的学際研究の取り組みの紹介
外国語習得の脳内メカニズムの解明
ー個別最適化された外国語教育の実現を目指してー

応用言語研究講座
准教授
鄭　嫣婷

グローバル化が急激に進む現代社会において、私たち一人一人が様々な職業的・社会的な場面で活躍していくためには、母国語以外の言語（外国語）を習得することが必要不可欠です。外国語をマスターすることは、すべての人間が等しく習得できる母語とは大きく異なり、学習者間の能力にばらつきが大きく、外国語能力の差が新たな社会的格差を生むと危惧されています。我々がどのように外国語を学び、どのようにして外国語習得に個人差が生まれるのか、その認知メカニズムに関する科学的研究はまだ多くはありません。そこで、東北大学国際文化研究科が中心になり、言語学、認知神経科学、第二言語習得研究を専門とする研究者が協働し、外国語が脳内でどのように習得されるのか、様々な個人の能力は外国語習得の成功とどのような関係があるのか、その習得の脳内認知メカニズムを理解し、すべての人にとってより良い教育を提案できるように、国際共同研究を進めています。

研究開始は2019年にまでさかのぼります。イギリスのESRC-AHRC UK-Japan SSH Connections Grant (2019-2021) に採択されたことがきっかけでした。この研究費の獲得をきっかけに、国際チームを結成し、日本とイギリスで4回に渡る国際共同シンポジウムと研究会を重ねながら共同研究を行ってきました (図1)。

図1

1. 2019年4月東北大学にてシンポジウムを開催. 左からDr. Adam Tierney (Birkbeck, University of London), Dr. Andrea Revesz (University College London), Dr. Kazuya Saito (University College London), Dr. Motoaki Sugiura (Tohoku University), Dr. Hyeonjeong Jeong (Tohoku University), Dr. Yuichi Suzuki (Kanagawa University).
2. 2019年7月第42回日本神経科学大会にて、言語機能とその獲得における非言語的な神経基盤の重要性に焦点を当てた国際シンポジウムを開催.
3. 2019年12月University College Londonにて、UCL-東北大連携シンポジウムを開催.
4. 2020年10月University College Londonにて、JSLARF-ESRCシンポジウムを開催.

新型コロナウィルス感染症の影響で対面の会議やセミナーができなかったり、実験実施が延期になったりしましたが、共同研究の成果が徐々に出始めています。2022年 *Bilingualism: Language and Cognition*に出版された研究では、様々な英語学習の経験を持つ大学生を対象に、聴覚能力、短期記憶、宣言的・暗示的記憶など様々な認知能力を測定し、外国語習得の成功を予測する要因を調べました。その結果、領域一般の聴覚能力が重要な要因であることが分かったのです。

Funded by UCL-Tohoku Strategic Partnership Funds

The neural correlates of mid- and end-clause silent pauses in L2 speech

図2

Saito, K., Cui, H., Suzukida, Y., Dardon, D., Suzuki, Y., Jeong, H., et al (2022). Does domain-general auditory processing uniquely explain the outcomes of second language speech acquisition, even once cognitive and demographic variables are accounted for? *Bilingualism: Language and Cognition*, 1-13. doi:10.1017/S1366728922000153
Révész A, Jeong H, Suzuki S, Cui H, Mastuura S, Saito K, Sugiura M. *The neural correlates of mid- and end-clause silent pauses in L2 speech*, American Association for Applied Linguistics Conference, Pittsburgh, PA, United States. March 19-21, 2022.

2021年、東北大学-ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンのマッチングファンドに採択され、機能的磁気共鳴画像法（fMRI)を用いて、第二言語の発話の認知メカニズムを検証する研究を進めています。外国語による自然な発話のメカニズム（メッセージの生成、符号化、発声）に対応する脳活動を取り出すことに成功しました。研究成果を2022年3月アメリカ応用言語学会にて発表し、大きな注目を集めました (図2)。

今後も外国語習得や処理に関する様々な国際的学際研究を推進して行く予定です。例えば、言語間の類似・相違が外国語話者の脳内の言語処理にどのような影響を与えるのか(2021-2023 JSPSニ国間国際交流事業採択)、外国語の音声、語彙、文法処理だけではなく、談話や感情の理解・産出など社会的文脈も考慮した広範囲の外国語習得モデルの構築（2022-2025科研基盤研究B採択）などのテーマに挑戦しています。東北大学国際文化研究科で言語習得のメカニズムを一緒に解明しませんか。

外側からみた国際文化研究科

Lake Forest College
Lecturer
水川　淳

私は普段、米国・イリノイ州のリベラルアーツカレッジで文化人類学を専門に教えています。

ご縁あって、2021年夏より1年間、第16回博報堂教育財団「日本研究フェローシップ」招聘研究員として、東北大学国際文化研究科に在籍させていただきました。

今回は、「生命の宿る世界の果ての生態系：3.11 津波に被災した東北沿岸漁村におけるコミュニティー先導型復興事業」というテーマの下、宮城県内の被災沿岸部を中心にフィールドワークを実施しました。

調査期間中は、それぞれの場所で進められている復興事業の取り組みを、地域の歴史的背景や地形、生態系環境や習俗、生活文化を踏まえて包括的に考察することを目指し、以下の①～③の手法を用いました。

①地区（元）住民を中心とする被災者や、復興事業運営者等「当事者」への聞き取り調査。

②震災後の被災地における、コミュニティー先導型復興事業活動にて参与型観察。

③図書館や個人が所蔵する文献や資料、写真や報告書の収集と分析。

来日時の仙台は、コロナ感染防止の緊急事態宣言が出されており、計画している調査のうち、はたしてどれくらいが実施可能だろうか？とか、どんな計画変更が強いられるだろうか？等の不安も抱えていました。

ですが、国際文化研究科長の高橋教授や、受入教員を担当してくださったゴダール准教授のおかげで、来日後の比較的早い時期にオンラインで開催されていた研究発表会への参加や、災害科学国際研究所の研究者の方々との意見交換の機会に恵まれました。

コロナ禍のもと、諸々の行動制限があった時期もあり、調査方法への工夫や研究への新しい活路を見出す努力も必要となりました。

そんな中でも、調査・研究に打ち込めたこと、そして一定の成果が得られたことは、国際文化研究科や災害科学国際研究所の教授の方々、スタッフの皆さんのお力添えがあったからこそである、と心より感謝しています。

新任教員紹介

国際政治経済論講座
助教
和田　萌

2022年4月に国際政治経済論講座に着任いたしました和田萌と申します。この場をお借りして、ご挨拶させて頂きます。専門は国際政治学で、とりわけ人の移動をめぐる政治や安全保障を中心に研究しています。

学生時代の大半は大阪と京都で過ごし、東北に住むのは今回が初めてです。もともと文化と政治の関係に興味があったので、学部時代は国際政治の中でも広報文化外交と呼ばれる政策領域を学んでいました。そこで文化外交の先進国であるフランスに留学したのですが、滞在中に起きたテロ事件をきっかけに、多文化共生社会の実現を目指して展開される国内政治にも関心を持つようになりました。約一年間グルノーブル政治学院で学んだ後、ストラスブール大学の修士課程と日本の大学院を行き来しながら学生生活を送る中で、人の移動という、内政・外交の双方に関わる領域に研究関心が移っていったように思います。

このような経緯から博士課程の研究では、安全保障上の課題として位置づけられるようになった人の移動という問題に取り組みました。具体的には、共和国を特徴づける理念やライシテと呼ばれる政教分離原則が、フランスの移民政策や安全保障政策においてどのような意味を持つのかについて研究しました。

「安全保障＝セキュリティ」というと、軍事力や経済力に結びつけて考えられがちですが、その概念は決して一枚岩ではなく、時には安全の確保を目的として思想や文化が動員されることもあります。したがって、安全保障のための手段が多様な政策領域にまたがって存在していることを念頭に、権力装置としての文化がそこでどのような役割を果たすのかという問いに取り組んでおります。そのため国際政治学のみならず、社会学や文化人類学のアプローチにも関心を持っています。国際文化研究科では、様々な専門分野の先生方や大学院生との研究交流を通じて、学際的視点に立ちつつ、研究と教育に邁進してまいりたいと思います。

退職教員からの言葉

言語科学研究講座
教授
小野　尚之

退職にあたって

平成11年（1999年）に国際文化研究科に赴任してから23年間、多くの先生や事務職員の方々にお世話になりました。また、多くの学生と出会い、共に学ぶことができました。このような貴重な出会いに恵まれたことに感謝したいと思います。この間、良いことも悪いこともたくさんありましたが、特に記憶に残ることが二つあります。

一つは、東日本大震災です。3月11日当日は、研究科長室で会議をしていました。大きな揺れで天井か壁が崩れてきて、部屋にいる全員でテーブルの下に潜り込んだのを鮮明に覚えています。その翌日から授業を開始するまでがさらに大変でした。研究科棟がしばらく使えなくなったので、西棟の教室を事務室や会議室にして仕事をしました。そんな状況で救いとなったのは、交流のある世界各地の大学からの激励、応援のメッセージでした。国際文化研究科が世界とつながっていることが実感でき、大いに励まされました。

もう一つは、言語総合科学コースの設置です。東北大学がグローバル30という国際化プロジェクトに採用され、国際文化研究科でも英語で学位が取れるコースを新設することになりました。自前で運営する英語コースは初めてでしたので、設計には色々と苦労しました。ようやく開講に漕ぎ着けたものの、その年の3月に東日本大震災が起き、いざ開講してみると応募者がゼロでした。そのため、世界各地で開かれる留学フェアにのぼり旗を持って参加し、プログラムの宣伝をして回りました。これも今となっては楽しい思い出の一つです。

現代は、いよいよ先の見えない時代になってきました。感染症に加え、戦争、経済不安など、悪い要素は数え上げればきりがありません。しかし、私がここで学んだ教訓は、質の良い教育を提供すれば、結果は自ずとついてくるということです。今後も国際文化研究科が、東北大学の中で、小さくともきらりと光る研究科として発展を続けることを願って止みません。

言語科学研究講座
教授
副島　健作

「国際文化」の縁

この4月より法政大学へ転勤することになりました。東北大学では高等教育開発推進センターに2012年に着任して10年、国際文化研究科には2013年4月に協力教員としてお迎えいただき、9年間在籍しました。当初は言語文化交流論講座、改組後は言語科学研究講座に所属しました。教職員の皆さんには大変お世話になりました。

東北大学では留学生に対する日本語教育が本務で、熱心に日本語学習に取り組む留学生に囲まれ、とても楽しく充実した毎日を過ごすことができましたが、同時に国際文化研究科の研究・教育に携わらせていただけたことは、実に幸せなことでした。講座では日本人だけでなく、いろいろな国々から多様な目的をもって来日し、様々な研究課題にとりくむ留学生が多く集まり、やる気にあふれ、著名な講座の先生方を交えた日本語言語学などについての議論は実に楽しいものでした。留学生の指導教員という立場になり、本務の留学生への日本語指導にも大いに生かされ、あらゆる場面でいろいろなことを先生方と学生のみなさんに教えていただきました。

国際文化研究科が標榜する、学際的かつ総合的なアプローチによる教育・研究の推進にどれほど貢献できたかわかりませんが、多様な分野の先生方に囲まれ，英語プログラムである言語総合科学コースや日本学国際共同大学院の運営にも携わらせていただき、視野を広げて複合的に物事を考えることの重要性について改めて気づくことができた9年間でした。現在、法政大学国際文化学部に所属し、引き続き「国際文化」研究・教育に携われることにご縁を感じています。東北大学で学んできたことを今後の人生に少しでも活かすことができればと思っています。

本当にすばらしい先生方、事務職員の方々、学生のみなさんにたくさん出会い、たくさん学べたことに、深く感謝しております。末筆ながら、今後の皆さまの益々のご発展を心よりお祈り申しあげます。

退職教員からの言葉

ヨーロッパ・アメリカ研究講座
教授
野村　啓介

遠きにありて思うことなど

令和4 (2022) 年3月をもって東北大学を退職いたしました。在職中は大変お世話になり、心より御礼申しあげます。後ろ髪をひかれる思いもありましたが、新年度からの新しい生活に順応すべく頭を切り替えているところです。

4月からは、縁あって二松學舍大学文学部に新設された歴史文化学科において教鞭を執ることになりました。高層ビルの建ち並ぶなかを通勤する生活を送っています。地下鉄での朝の通勤ラッシュには慣れるどころか、むしろウンザリすることの方が圧倒的に多いといえましょう。時が経つにつれて、緑に囲まれた東北大学の川北キャンパスが懐かしくなってきました。幸い、大学は千鳥ヶ淵に面する一帯にあり、都会の喧噪からは離れた、多少なりとも落ち着いた雰囲気のところにあります。すぐ目の前には江戸城（皇居）があり、辺りは絶好の散策コースともなっています。よい気分転換にはなりそうです。

新設の歴史系学科では一人で西洋史を担当しており、個人的に非常にやり甲斐を感じつつも、目の前の仕事に追われつづける日々です。私学の噂に違わず授業負担は重く、少なくとも倍にはなりました（地獄の授業準備が続いています）。くわえて、久しぶりに学部教育に復帰して、「高校4年生」を前に戸惑うことも少なくありません。彼らをいかにして4年間で卒業させるか、ということが大きな課題になりそうです。

ふりかえれば、19年間の仙台生活でした。長いようで短いような、何ともいいがたい感覚があります。今思えば、東北大学時代は、じっくりゆっくりと思考をめぐらせ、研究に没頭できる環境だったな…とつくづく思われてきます。異動の決断が間違っていなかったといずれ胸を張っていえるよう、最善を尽くしたいと考えているところです。仙台は第二のふるさと。在仙時はできなかった観光三昧のため伺いたいと思います。

最後に、国際文化研究科とみなさまのますますのご発展をお祈りしております。

受賞報告

○GSICSフェローの大谷亨さんが昨年度国際文化研究科に提出した博士論文が第２１回アジア太平洋研究賞（井植記念賞）を受賞しました。

○日本マクロエンジニアリング学会の第42回春季研究大会で、本研究科のリン イ（MC2）さん、劉庭秀教授、眞子岳特任助教、劉暁玥専門研究員、大窪和明准教授が発表した研究成果が、表彰（研究奨励賞）されました。

○アジア・アフリカ研究講座の博士課程後期３年の課程に在籍する曽小蘭さんと同講座のGSICSフェローの楊妍さんが日中関係学会第10回宮本賞の優秀論文賞（大学院生の部）に選ばれました。

○アジア・アフリカ研究講座博士後期課程の大谷亨さんが、「第4回　忘れられない中国滞在エピソード」（主催：日本僑報社　後援：中華人民共和国駐日本国大使館、読売新聞社）で３等賞を受賞しました。

○国際環境資源政策論講座の博士後期課程3年幕田実さんが、第41回日本マクロエンジニアリング学会秋季大会で奨励賞を受賞しました。

修了者からのメッセージ

国際政治経済論講座
令和4年3月
博士前期課程修了
Rachel Naddeo Gomes

Research is a two-way street

It was early 2019 when I first arrived in Japan to start a new life as a researcher at Tohoku University. My experience in Sendai has been very welcoming from the start, despite the cold winters and rainy seasons, and Japan has offered me plenty of exciting opportunities as well as its fair share of challenges. Although I am far away from family and friends, I am thankful for the support of new colleagues and university staff in my day-to-day life.

Entering the G2SD program as a Master's student in 2020 was not the only novelty, as the COVID-19 pandemic also changed the ways we work, learn, and lead our lives. Nevertheless, professors in the program adapted to this new reality to share their knowledge with students in new ways. During the weekly seminars and joint seminar sessions, I always received helpful feedback and fresh insights for my research. My advisor and labmates have continuously provided me with a safe and constructive environment to thrive. Despite the different topics of study, discussions always result in new ideas and words of encouragement when I feel stuck. I was particularly lucky with my labmates who have supported not only my research but also have made my life in Japan indefinitely more enjoyable. I am sure I will keep many life-long friendships from my time in Sendai.

Despite challenging times, this program has been remarkably enriching due to its interdisciplinary approach that has allowed me to have new perspectives and gain a broader knowledge of my own field of study. I came to Japan with a vague idea of what to expect but the past three years have taught me much about what it means to conduct research and how I can continue to contribute to the international relations field. I learned that research life requires finding the joy in the little discoveries, but also more patience and perseverance to achieve one's goal 'later rather than sooner'. Research is a two-way street which means that I also achieved tremendous personal growth since arriving at Tohoku University. The Master's graduation was, of course, the crown of the whole experience!

Among many reasons, my time at Tohoku University motivated me to continue into the PhD program at the Department of International Cultural Studies. I am sure that the experiences in this department will be extremely valuable and advantageous for my future. Academic life is not always easy - there are plenty of challenges - but there are also opportunities that you can take advantage of in order to learn and grow. I hope all students' research experience can be educational and challenging (in a good way!) for their future achievements.

応用言語研究講座
令和4年3月
博士後期課程修了
坂場　寛子

実体験から得た問題意識の答えを求めて

研究の道に足を踏み入れることを決意したとき、私は社会人6年目でした。英語が好きでネイティブのように話せるようになりたいという思いで学部時代をアメリカで過ごし、帰国後は英会話教室や大学の研究室で働いていました。研究室で学生たちが日々自分のテーマに基づき研究に打ち込む姿を見ているうちに、いつしか私も自分の興味のあるテーマで論文を書いてみたい、そして将来的には大学で英語を教えられるようになりたいと思うようになりました。この思いがきっかけとなり、英語教育分野の研究を行うために国際文化研究科に入学しました。

しかし、いざ修士課程に入ると、研究の知識や経験が全くなかった私は、研究テーマを決めることから難航しました。今思えば、自分自身のやりたかったことは漠然としており、とても2年間では研究しきれない壮大な絵物語のようなテーマを思い描いていました。そこからテーマを絞り込むためのヒントとなったのは「この表現はアメリカではよく使われるの？」という、英会話教室で教えていたときに多くの生徒から受けた質問でした。当時、私は留学経験に基づく感覚的な答えしかできず、そのことがずっと気にかかっていました。この実体験から得た問題意識を掘り下げ、英語学習者にとって有益かつ分かりやすい英語表現の使用頻度の分析方法と教材としての視覚的表現方法を模索しました。最終的には、コーパス言語学、英語教育学、デザイン学を融合させた博士論文を書き上げ「一つの答え」を見つけることができました。

今後は、国際色豊かな研究環境で得た知識と研究基盤を活かし、英語学習者にとって役立つ教育的研究をさらに進めたいと考えています。また、AIの台頭やコロナ禍により英語教育も変化を余儀なくされているなか「時代に合った英語教師」のあり方を考え、学生が英語を通じて多くの学びを得られるように尽力していきたいと思っています。

令和4年度科学研究費補助金採択一覧

氏　名	課題番号名	研究種目	新・継	研究課題名	備　考
Godart G.Clinton	19H01197	基盤研究(B)	継	越境する日蓮主義の基礎研究ートランスナショナル・ジェンダー・スピリチュアリティ	補助金
ジスク マシュー・ヨセフ	19H01265	基盤研究(B)	継	多言語による日本語学用語辞典および日琉諸語の用例に対するグロス規範の作成	補助金
大河原　知樹	19H01404	基盤研究(B)	継	民法、民事訴訟法におけるイスラーム法と中東法の国際比較研究	補助金
池田　亮	21H00685	基盤研究(B)	継	「航行の自由」と英米覇権ー開かれた国際海洋秩序とそれへの挑戦	補助金
青木　俊明	21H01449	基盤研究(B)	継	心理要因と認知バイアスを考慮した居住意思決定理論の実証と縮退地域の居住政策の提案	補助金
佐藤　雪野	21H03699	基盤研究(B)	継	EUにおける移民・難民統合政策の課題と展望―旧社会主義圏を中心に	補助金
Jeong Hyeonjeong	22H00674	基盤研究(B)	新	他者との相互作用を通した第二言語習得の神経基盤ー口頭・筆記の共通性と特殊性ー	補助金
呉　佩遙	20J21655	特別研究員奨励費	継	近代日本における信仰言説の研究―仏教・歴史・国家	補助金・特別研究員
大澤　絢子	21J00625	特別研究員奨励費	継	性に見る近代日本仏教の教祖像――史実と創作の相互関係――	補助金・特別研究員
君島　彩子	21J40124	特別研究員奨励費	継	東日本大震災後における仏像の役割―誰もが仏像を作れる時代の信仰のかたち―	補助金・特別研究員
吉原　将大	22J00761	特別研究員奨励費	新	第二言語としての日本語における語彙獲得プロセスの解明：語彙競合による検証	補助金・特別研究員
中本　武志	22F20750	特別研究員奨励費	新	日本語コーパスの比較分析および応用研究	補助金・外国人特別研究員
中本　武志	17K02670	基盤研究(C)	継	日中バイリンガル幼児のコード・スイッチングに見られる普遍的制約	基金
勝間田　弘	17KT0117	基盤研究（C）	継	途上国のNGOとグローバル・ガバナンス	基金
Jeong Hyeonjeong	18K00776	基盤研究(C)	継	外国語学習を通した情意や社会性の育成：認知神経科学からの検証	基金
杉浦　謙介	18K00820	基盤研究(C)	継	外国語eラーニング教材の仕様最適化ー学習効果・使用者評価・学習実態に基づく研究ー	基金
志柿　光浩	18K00821	基盤研究(C)	継	大学外国語教育プログラム内評価に適合したスペイン語スピーキング能力測定手法の開発	基金・名誉教授
山下　博司	19K00075	基盤研究(C)	継	シンガポールにおける民族集団の多元的共存と宗教・文化政策ー宗教間関係を焦点にー	基金・名誉教授
鈴木　美津子	19K00439	基盤研究(C)	継	ロマン主義時代の文学作品に見られるウォレン・ヘースティングズ表象	基金・名誉教授
藤田　恭子	19K00490	基盤研究(C)	継	多言語性の否定と肯定―ルーマニア・ドイツ語文学に見る言語アイデンティティの諸相―	基金
黒田　卓	19K01012	基盤研究(C)	継	イラン系ムスリム知識人がみた近代世界	基金・名誉教授
渡邊　竜太	19K01049	基盤研究(C)	継	チェコ／ドイツ国境地域における20世紀地域社会史	基金・GSICSフェロー
勝間田　弘	19K01519	基盤研究(C)	継	ASEAN外交と国際関係の理論	基金
井川　眞砂	20K00381	基盤研究(C)	継	マーク・トウェイン晩年の批評精神――まなざしは〈笑いの武器〉のその先へ	基金・名誉教授

令和4年10月12日現在

氏　名	課題番号名	研究種目	新・継	研究課題名	備　考
坂巻　康司	20K00489	基盤研究(C)	継	近現代フランス演劇における<祝祭>概念の総括的検討	基金
小原　豊志	20K01032	基盤研究(C)	継	異端のデモクラシー――初期アメリカ合衆国における人民主権論のポピュリズム的展開―	基金
朱　琳	20K01468	基盤研究(C)	継	清末知識人と明治日本の政治学――東アジアにおける連鎖と比較の政治思想史	基金
市川　真理子	21K00338	基盤研究(C)	継	近代初期イギリス演劇における基本的舞台道具の使用方法に関する総合的研究	基金・名誉教授
鈴木　道男	21K00415	基盤研究(C)	継	「国民詩人」の共有とディアスポラーメディアによる「民族」形成機能と文学	基金
高橋　大厚	21K00519	基盤研究(C)	継	ラベリング理論の精緻化：中国語のスルーシングを通して	基金
江藤　裕之	21K00753	基盤研究(C)	継	香港、タイの大学における課外英語学習支援の現状、及び我が国の大学英語教育への応用	基金
山下　博司	22K00068	基盤研究(C)	新	マレー半島南半の複合社会における宗教の多元的共存と包摂的共生秩序の研究	基金・名誉教授
勝山　稔	22K00287	基盤研究(C)	新	中国通俗小説受容の完全な体系化に向けた研究―民間翻訳の本格導入による多面的解析	基金
藤田　恭子	22K00460	基盤研究(C)	新	ディアスポラとしてのルーマニア・ドイツ語話者と文学―世界への拡散・孤立化・連帯―	基金
大窪　和明	22K04361	基盤研究(C)	新	データ駆動型ロバスト最適化による次世代の復興土地利用計画に関する研究	基金
佐野　正人	17K18476	挑戦的研究(萌芽)	継	東アジアにおける戦後歴史認識の横断的研究――戦後初期と1990年代を中心に――	基金
Jeong Hyeonjeong	22K18464	挑戦的研究(萌芽)	新	外国語による感情処理神経メカニズムの解明―教室外の言語経験とfMRIの融合―	基金
妙木　忍	17K17596	若手研究(B)	継	医学的まなざしと女性の身体―解剖学と展示の政治性をめぐる国際比較研究―	基金
中山　真里子	19K14468	若手研究	継	日英バイリンガルのL2表記表象の解明	基金
大澤　絢子	20K12836	若手研究	継	近代日本における教祖像形成に関する総合的研究--最澄・空海・親鸞・日蓮--	基金・特別研究員
堀田　智子	21K13032	若手研究	継	日本語学習者の不同意表明にみられる語用論的能力の発達過程	基金・GSICSフェロー
メスロピャン　メリネ	21K13085	若手研究	継	Armenian Refugees in the Early 20th c. Japan: Mixed Methods Analysis	基金・GSICSフェロー
佐藤　正弘	21K13276	若手研究	継	COVID-19の感染リスク等に関する社会的学習の実証研究	基金
繁田　真爾	22K12987	若手研究	新	「悪」の統治実践と人間観をめぐる近現代日本の思想史的研究―監獄教誨・死刑・宗教―	基金・GSICSフェロー
吉原　将大	22K13867	若手研究	新	視覚刺激の空間的変化が単語認知に及ぼす影響の解明	基金・特別研究員
劉　庭秀	19KK0272	国際共同研究加速基金(国際共同研究(B))	継	遊牧民のエネルギー・環境問題の実態解明と持続可能性の再構築―HEVの有効利用策―	基金
山下　博司	22KK0001	国際共同研究加速基金(国際共同研究(B))	新	アジア多文化社会におけるエスニシティと宗教間宥和―日本の移民問題等も	基金・名誉教授
崔　海寧	21K20007	研究活動スタート支援	継	Neural correlates of processing second language speech acts: effects of L2 speech acts awareness and experience	基金・GSICSフェロー
和田　萌	22K20107	研究活動スタート支援	新	現代フランスの対外政策における宗教事象の位置付け―ライシテ外交を中心に―	基金

INFORMATION

キャリア講習会

国際文化研究科では、毎年、研究職、ビジネスパーソン、専門技術職など、さまざまな分野で活躍する修了生を招き、就職の経験談、アドバイスを研究科の後輩にお話しいただいている。2021年度は、2020年度に続きコロナ禍のためオンライン開催となった。令和3年11月27日に開催された講習会では、国際環境システム論講座で2011年3月に博士号を取得され、現在は資源循環に取り組む会社で取締役を務める、車佳さんにお話しいただいた。車さんは、何事にも情熱と熱意を持ち、ブレない強固な信念が物事を成し遂げる力になること、さらに出来るだけ多くの人と交流し切磋琢磨することが仕事の幅を広げると強調された。また車さんは、在学中に培われた、社会人として役に立つ素質として、学会発表などスケジュール遵守による計画性、そして短時間で大口の契約をする判断力を指摘された。こうした点を在学生と共有できた点で、本講習会は大きな意義があったと考えられる。(池田亮)

地震の被害状況

令和４年３月１６日(水)に発生した福島県沖地震によって、国際文化研究科でも建物や設備に様々な被害が発生しました。

中でも、マルチメディア教育研究棟の６階大ホールでは、壁面崩壊や天井石膏ボードの崩落、スライディングウォールの破損等があり、研究科内で最も大きな被害が生じました。

また、各研究室においても、パソコンや書籍等の落下が多数発生しましたが、深夜の時間帯における地震であったため、研究科の構成員は全員無事で、負傷者も発生しなかったことは幸いでした。

マルチメディア教育研究棟６階大ホールにおけるスライディングウォール破損の様子

第27回公開講座

「国際文化基礎講座」「ことば」とヒト～そのとき、脳と心で起きていること～

新型コロナウィルスの流行が一時的に収まったことから、2年ぶりに国際文化基礎講座が開催されました。しかしながら、感染拡大の懸念が払拭できなかったため、第27回公開講座はオンラインによるライブ配信形式で開催されました。また、これまでの参加者の方々からいただいたご意見も踏まえ、今回は令和3年11月13日(土) のみの1日開催となり、84名もの参加を得ました。

まず、言語科学研究講座　中山真里子准教授が「発話準備の脳内プロセスと表記の影響ー漢字とかなで何か異なる？何が異なる？ー」と題する講義を行い、発話にむけて脳内で生じている準備作業を解説しました。次いで、応用言語研究講座　鄭 嫣婷（ジョン　ヒョンジョン）准教授が「脳から見た効果的な外国語学習法」と題して講義し、「話すこと」が外国語習得の上で有効な学習方法であることを紹介しました。いずれも、最新の知見を交えながら分かりやすく「脳の働き」を解説したことから、講義後の懇談会には多くの聴講者が参加し、なかなか終了できないほどの盛況となりました。(青木俊明)

オンライン入試説明会

令和４年度は新型コロナウィルス感染症予防の観点から、7月末の研究科オープンキャンパスをオンライン方式としました。そのため昨年同様、オンラインによる入試説明会を７月８日（金）18時から1時間45分にわたって開催することにしました。説明会には国内外から１３名の参加者があり、入試実施委員長および各講座・英語コースに在籍する学生一名ずつから、本研究科の概要や特徴、各講座・コースの特色が説明されました。参加者から寄せられた質問のすべてに回答し、必要な情報が十分得られたということで満足してもらえました。なお、オンライン入試説明会は次回11月18日（金）にも開催する予定ですので、これからも研究科ホームページのチェックをよろしくお願いします。(寺本成彦)

入学を希望される皆様へ

春季入学試験は
令和5(2023)年2月9日(木)、10日(金)に行われます。

本研究科は、柔軟な思考力と広い視野および一定の語学力を有して、国際舞台で活躍できる創造的研究者または高度専門職業人になろうという明確な目的意識を持った学生を求めています。
なお、上記の入学試験の詳細については、本研究科ホームページをご覧ください。

お問い合わせは、本研究科教務係において受け付けています。

連絡先
東北大学国際文化研究科 教務係
TEL: 022-795-7556 / FAX: 022-795-7583
E-mail:int-kkdk@grp.tohoku.ac.jp

東北大学大学院 国際文化研究科 GLOBE No.35
○東北大学大学院 国際文化研究科 広報 No.35／令和4年10月
○編集／東北大学大学院 国際文化研究科 広報委員会　〒980-8576 仙台市青葉区川内41　TEL:022-795-7541